

茨木共創会議

これからの共創を考えてみよう



Program

- ① 茨木市の「共創」について
- ② ゲストレクチャー：岡晴信さん
チャレンジをみんなで支援する取組みについて
- ③ トークセッション：岡晴信さん×山崎亮さん×向田明弘
新たな時代における「茨木らしい共創」のあり方とは
- ④ アイデアワーク（参加者による意見交換）
- ⑤ まとめ、今後について

2024
3.23±
13:30～16:30

Guest



岡 晴信 さん 竹中工務店まちづくり戦略室副部長/
雲南市ソーシャルチャレンジ特命官
2005年竹中工務店に入社。大手企業のグローバル本社の構築をはじめ、企業のオフィスづくりのコンサルティングに従事。2017年にまちづくり戦略室を立ち上げ、企業と自治体の新しい共創の仕組みづくりに従事する。



山崎 亮 さん studio-L代表
地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクトが多い。



向田 明弘 茨木市共創推進課長
1997年入庁。閉館した市民会館跡地の活用検討（おにクル整備）を2016年から担当。2023年からは新しくできた共創推進課において、おにクルを中心とした共創の取組を進める。

① 茨木市の「共創」について

市民会館の閉館以降、市民の皆さんとの対話をはじめ、おにクル開館に向けたプロセスとして、多くの市民参加型の取組みを進めてきました。おにクル開館以降もこのスタンスを維持し、市民や市民活動団体のみなさんと連携した取組みを実施しています。そして、茨木市ではおにクルを「共創の中心地」と位置付け、市民や市民活動団体だけではなく、大学や民間事業者のみなさんも含め、市全体で「共創」の取組みを推進していくためのしくみづくりを進めていきたいと考えています。



② ゲストレクチャー：岡晴信さん チャレンジをみんなで支援する取り組みについて



民間の建設会社の社員でありながら、5年前から島根県雲南市に出向し、企業と地域が連携して取り組む事業づくりを担当しています。雲南市では、3名の人材が民間から出向して共創事業に関わっており、積極的に民間も含めた外部人材の知恵やネットワークを生かし、「チャレンジ」というキーワードで官民連携のまちづくりに取り組んでいます。

●子どもチャレンジ

中高生が地域の魅力を発掘し、それらを生かした事業（特産品のプロデュース等）を生み出しています。

●若者チャレンジ

訪問看護ステーションやコミュニティナース、ショッ

ピングリハビリなど、大学生や20～30代の社会人が新たな活動を生み出しています。イノシシの精肉などの「食」の取り組みや、移住者も含めた地域の人たちのやりたいことが、地域の課題解決（獣害等）にもつながっている。東京や大阪から市内企業へのインターンシップなど、市外の大学生が「チャレンジ」できる受け皿をつくるとともに、中高生や大学生に市や地元の銀行が資金をサポートする「スペシャルチャレンジ制度」もあります。

●大人チャレンジ

地域の人たち自身でマーケットをつくるなど、地域の自治組織（概ね小学校区）をベースとした取り組みが生まれています。

●企業チャレンジ

実証実験を繰り返しながら採算性も含めて取り組むヤマハ発動機によるグリーンスローモビリティや、東京のベンチャー企業との協働による、空き家を活用したシェアオフィスなどが進められています。

③ トークセッション：岡晴信さん×山崎亮さん×向田明弘 新たな時代における「茨木らしい共創」のあり方とは



●岡氏のレクチャーに対する感想

山崎さん（以下、山）：雲南市の人口は茨木市の1/8で、大学も無い、交通も便利ではないのに、雲南市の取り組みの話を聞いていると「うらやましい」と感じてしまいましたね、なぜでしょう。

向田（以下、向）：茨木市は雲南市に比べて人口は多いものの、活動の「熱量」には、まだ余地があるのかもしれないですね。

●それぞれが考える「共創」とは？

山：「共創」とは、まさに岡さんが話してくれたような状況のことを指すのでしょうか。若い人から高齢の方まで、多様な人たちとともに何かをつくるという環境のもと、これだけ多くのプロジェクトが生まれている。この状

況が「うらやましい」と思ったひとつの要因だと思います。活動をしている「熱い人たち」を、仮に「活動人口」と表現すれば、雲南市は活動人口の比率が大きいのではないのでしょうか。茨木市でもおにクルをつくるプロセスから、その機運は高まっていると感じています。

向：おにクルオープンまでのプロセスでは、「活動人口」の視点を意識し、取り組んできました。茨木市内のいろんな場所で、そのような熱量は生まれてきていると思います。

岡さん（以下、岡）：雲南市は人口減少が進んでいる地域で課題が「先鋭化」していることが、活動をはじめる動機としてわかりやすいという面はあると思います。活動する人の比率を高めることは簡単ではなく、さまざまな主体が出会い、話をしながら、やっていることを少しずつ

理解し合うプロセスが必要です。茨木市では「おにクル」がそのための拠点になり得るのではないのでしょうか。

●茨木らしい「共創」の視点とは？

山:確かに茨木市は「幸せすぎる」のかもしれない。梅田や京都にもアクセスしやすく、茨木市やその周りには「楽しいこと」がたくさんあるので、そこに流れていきがちになります。楽しさをサービスとして消費する「消費者」ではなく、地域の課題に対して「楽しんで」アプローチする人たちをどう増やしていくか、「楽しめる」熱量を醸成していく工夫が必要となるでしょう。

向:市の共創推進課がおにクルにオフィスを構えたのは、そういった熱量をおにクルを拠点に高めていくことが一つの役割だと捉えているからです。おにクルオープンに向けて、市民手づくりのイベントを企画・運営した実行委員会のメンバーからは、早くも1周年の企画をやりたいという話をもらっています。また、実行委員会のつな

がりの中から新たな活動も生まれています。このような熱量をいかに次に展開できるかを考えていきたいです。

岡:「課題を面白がること」はとても大切です。すぐに解決できないから課題であり、すぐに解決できると考えないほうがいい。いろんな人たちがつながって、解決の糸口が見えてくるものです。雲南市では、そのような「顔が見える」状況がつくりやすいが、茨木市ではより工夫が必要になるかもしれないですね。

向:「1万人が集まる1回の企画より、100人が集まる多様な企画を100回」というように、顔が見える企画を大切にしたいです。このような企画や活動への理解を広げていくためには、評価の視点として「共感」が大切だと感じています。

岡:おにクルがあることは茨木市民にとって幸せなことだと思います。おにクルをみんなで使い倒せば、可能性は無限にあると感じています。

④ アイデアワーク 参加者による意見交換

参加者は8つのテーブルに分かれ、ゲストレクチャーとトークセッションの感想を共有するとともに、テーブルに置かれた5つのカードを裏返し、「茨木らしい共創とは？」「共創の拠点としてのおにクルの可能性は？」など、そこに書かれたお題について対話していきました。



発表

Eテーブル



熱量が高い人たちが集まる「濃さ」も大切ですが、いろんな人たちと交わり広げていくことも茨木では実現したい。「共創」の拠点おにクルでは、取組みを継続していくために必要な「共感」を生み出す、「いいね!」と言いやすい雰囲気づくりが重要。

Aテーブル



茨木らしい「共創」は、おにクルをつくったプロセスに象徴されるような市民参加型での取組みだと思う。それには、自由に意見が言える場、夢を語れる場、おもしろがることができる場が大切で、おにクルでそのような場をつくってきたい。

成果

レクチャー、トークセッションの感想共有、アイデアワークでの意見交換の結果、今後の茨木市における「共創」について多くのヒントが得られました。それらを以下の4つのポイントにまとめました。

多様な主体の参加による「共創」の場の創出

おにクルオープニング実行委員会をはじめとする茨木市民や、民間企業、大学の教職員、学生、市職員などが今後の「共創」の主体となる。「茨木共創会議」で、お互いを知ることができ、つながりが生まれたことが大きなステップとなった。

茨木市の「共創」の拠点としてのおにクルの役割

おにクルの特徴の一つは、オープンスペースなど、「活動が見える」空間がデザインされていること。「顔が見える」「共感できる」関係づくりが重要であり、おにクルはまさにこのような視点を取り入れることに適した複合公共施設である。

市民の「熱量」を生み出す装置としての「共創」

茨木市における「共創」の大切な役割は、多様な主体の協働による新たな事業や活動の創出だけでなく、活動をする多様な市民の「熱量」という“目に見えにくい価値”を生み出し、高めていくこと。そのためには、熱量をもった人々たちによる「活動人口」を増やしていくことが大事。

地域課題を楽しみながら解決していくプロセス

地域課題を発見することを楽しみ、さらにそれらを解決していくことも楽しむ。解決を急ぐのではなく、多くの人たちがつながって、学び合い、知恵や行動力を出し合って、試行錯誤するプロセスが、関わる人の人生を豊かにしていくことにもつながる。

⑤ まとめ、今後について



岡さんより

このような場はとても貴重だと感じました。今回、はじめて出会った方もいると思いますが、お互いが「やりたいこと」について会話してほしいと思います。いきなり「チャレンジ」することは難しくても、「応援」することはできる。また、誰かのやりたいことを「つなげること」も大切な役割です。ぜひ、次のステップにつなげてほしいです。



向田より

皆さんが意見交換する様子を見ていて、「いいね！」と言える雰囲気づくりや空間づくりが改めて重要だと思いました。おにクルでは、さまざまな人や団体が、「シェア」の感覚で空間を共有しながら、新しい活動ややりたい事に次々とチャレンジしていくことで、茨木らしい「共創」につながっていくのではと思っています。



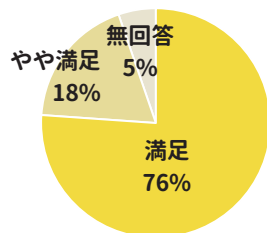
山崎さんより

「労働」と「余暇」について考えてみました。「余暇」の時間に「活動」するのか「消費」するのか。「余暇」の時間にお金をそれほど使わない「活動」をすれば、必要以上にお金を稼ぐ必要がなくなり、結果として「余暇」、さらには活動の時間を増やすことができます。一方で、「余暇」の時間に「消費」をする場合は、出費がかさむぶん稼ぐための時間は長くなり、結果として「余暇」の時間が減り、その短い「余暇」の時間にはより刺激的なものを求めてしまう。「消費」ではなく、「活動」のサイクルを楽しく思える方にとっては、「おにクル」はうってつけの場所だと思います。



アンケート

満足度（回答者38名）



- ・企業・行政の方も交えての対話が新鮮だった。
- ・つながりの場に可能性を感じた。
- ・「共創」という言葉が馴染んでいなかったが話を聞けてよかった。

ゲストレクチャーの感想

- ・深刻な課題を面白がって取り組む。その方がうまくいくというのが印象的だった。
- ・茨木市がどうなっていくといいのか考えやすくなった。
- ・「失敗のない人生は失敗だ」まさにその通りだと感じた。「いいね」と言える存在でありたい。

トークセッションの感想

- ・「活動人口を増やす」「熱量を上げていく」「対話が大切」といった言葉が心に残った。
- ・消費者ではなく、熱意のある活動者をいかに増やしていくことが大事かを学ぶことができた。

おにクルツアーを開催しました！

おにクルオープニング実行委員会のプログラムとして、茨木市民がおにクルについて学んだことをもとにつくったガイドツアーを、茨木共創会議の前後で実施しました！ガイドそれぞれが自由な発想で案内するツアー、今後も展開していく予定です！

